夕焼け通信 1364号　2022.8.22
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その2）110

木幡智恵美

猛暑、コロナ5波（3）

猛烈な暑さは、台風の通過を機に、一気に和らいだ。家の塗装も、初盆を迎える前に何とか終了した。畑では、仏壇に供えるスイカ（今年はたった一つしか生らなかった）を採り、アジウリ、カボチャ、オクラ、ナスを収穫した後、我が家の墓参り。父の実家の墓参りに行き、従兄の二男のお嫁さんに初めてお会いした。二男は娘と同じ歳で、少し歳下の奥さんと二か月前に結婚したばかり。幸せ太りか、肉付きがさらに良くなっている。コロナ禍で、身内だけで結婚式を挙げたとのことで、写真を見せてもらった。新婦の和服姿が美しい。「コロナが広がって、結婚する人たちも少ない中で、本当にラッキーだったわ」と、従兄は嬉しそうに話す。「あとは、たかちゃんだね」と言うと、「あれは、その気がなくてね」とのこと。「うちの二人も、全然」と返しつつ、目の前の二人にあやかりたいと願う。帰り際、従兄が栽培した巨砲とシャインマスカットを一房ずついただき、あと二箇所の墓に参って帰った。

帰ってから、仏壇に、ナスの馬、スイカ、巨砲、シャインマスカットを供える。仏壇の上に飾った写真の義母が笑っている。スイカが極好きだったのだ。

次の日からは雨で、秋雨前線が中国、近畿、中部にまで広がり、線状降水帯も発生しているようだ。コロナ感染についてのニュースでは、東京で五千人を超えたと報じた。賛否両論の中、無観客とはいえ、オリンピックが開催されたのだから、こうなるのは当然のことだ。松江でも二けたの数字で、オリンピックの警護に当たった人が数人含まれている。今月頭にワクチンの一回目を接種したけれど、感染はしたくない。

初盆で義姉たちが来る日、雨は上がった。コロナ拡大もあり、大勢で集まることは避け、娘たちには二日前に来てもらった。この日は義姉、姪二人とその子ども二人（一人は今県外）が来て、一通り読経して義母を偲んだ。「ソーメンでよければ、お昼食べません」と誘うと、「じゃ、いただくか」と言うので、ソーメンを茹で、あるもので昼食。ここ数年は、盆正月くらいにしか訪れることがなかった義姉たちが、義母の発病以来、結構顔を合わせるようになった。この日も義母の思い出や、それぞれの近況を語り、ゆったりと過ごした。

「お母さん、にぎやかなのが好きだったから、喜んでるわ」と義姉が写真を見上げて言った。

がらがら橋日記

宮森健次

アリ、ハチ、ムカデ

外仕事を始めたころ、真っ先に購入したのが携帯式の蚊取り線香である。腰に下げておくとまず蚊に刺されることはない。一度ヤブ蚊の群れに襲撃され、不思議に思って見てみると線香の火が消えていた。以来、度々煙が出ているのを確かめ、決して切らすことがないよう注意をしている。この仕事、人間から不快な思いをさせられることがない代わりに、油断すると虫たちからひどい目に遭うのだ。もう一つ、先輩から必需品と言われたのがハチ専用の殺虫スプレーだ。確かに、スズメバチはよく見かける。糖分の多い果樹の周りを仕事場としているのか、近づくと向こうも低い羽音を響かせてぼくの周囲を二度三度と往復する。どこの家でもスプレーを用意してくださるのだが、まだ使ったことはない。職務質問が続く間静かにしていれば、どこかへ飛んでいってしまう。向こうが「一応これがお役目なもんで」ぐらいの淡泊なあしらいなので、攻撃する必要を感じたことはない。

閉口したのは、ハチよりもアリである。足とか腹、腋などに注射針を刺したような痛みが走る。たいていの場合一回で終わらず、その近辺を二度三度と刺される。その晩は痛み痒みはないのだが、翌朝起きてみると、赤く腫れてひどく痒い。それが四五日、場合によってはそれ以上続く。不快なことこの上ない。一体何が刺しているのか噛んでいるのかしばらく分からず、対策の立てようがなかった。はじめ、蚊取り線香のバリアをかいくぐって攻撃してくるのだから、挙動が盲進的なアブではないかと考え、腰から上の高さを警戒していたが、アブのいない庭でも同じ目に遭った。アリだと分かったのは、ついに犯行現場を目撃したからで、腹にへばりついているそれの容姿風体をしっかり記憶して調べたら、ハチ同様の毒針を持つオオハリアリだった。

その後も何度か被害に遭いながら、分かってきたのは、彼らは堆肥になりつつある腐った葉や木などに巣くい、それらを食して棲息範囲を広げているようなのだ。暑いという理由で長靴を避け、スニーカーで作業するような愚か者などやっつけるのは簡単で、足、それも両足からズボンの中を這い上がり、膝、腿裏、尻、腰と順に刺して痒みに悶えさせたものである。

失敗に懲りた今では、長靴と手首を覆うゴム手袋で防衛力も格段に向上を見、余裕もできた。伐採して時が経ち、腐葉土然となった草木をゴミ袋に詰めるときなど大量の彼らとその仲間たちムカデ、ハサミムシ、ダンゴムシの類いを目にするが、どこか親しみを感じるようになった。同じ現場で、分解という大切な仕事を担っているのだ。ご苦労さんです。

30代フリーター　やあ、ジイさん。山上徹也はなぜ安倍晋三を狙ったんだ。旧統一教会に深い恨みがあったとしても、そこと結びつきがあったというだけで殺すだろうか。

年金生活者　彼の犯行は、自分から母を奪った父に殺意を抱く男児のエディプス・コンプレックスを40年近く遅れて経験し、その末の凶行と見ることができる。

フロイトが想定したエディプス・コンプレックスは3〜6歳のときに起きる無意識の心的過程とされる。山上がこの年齢にあたる4歳のとき、彼の父は自殺した。山上は殺意を抱く対象を失った。不在となった現実の父に代わる象徴的な父として現れたのが母ののめり込んだ旧統一教会だった。

その象徴的な父は山上から母を引き離したばかりでなく、多額の献金をさせて破産に追い込み、山上の生活を困窮させた。通常、エディプス・コンプレックスの過程で母と男児の仲を裂こうとする父は、やがて男児の模範となることで子の殺意を鎮める。だが、山上の象徴的な父となった教団は母子の生活を破綻させ、山上の模範になる余地はなかった。彼の殺意は消えるどころか強化された。

象徴的な父の具体像は教団トップの文鮮明として意識され、具体的な殺害の対象となったはずだ。だが、文は死に、殺意はその後継者である妻の韓鶴子に向けられた。ところが、教団のガードが固く、犯行をあきらめざるを得なかった。

30代　それで標的を安倍晋三に替えたのは飛躍のし過ぎだろう。

年金　安倍が韓をたたえるビデオメッセージを教団の「友好団体」の集会に寄せたのを知った山上は彼に象徴的な父の像を見たに違いない。それまで恨みを抱いたことのない元首相に殺意を覚えた理由がそこにある。長いあいだ探し求めていた、殺すべき父にやっと巡り会えたと山上は確信したに違いない。

30代　時事通信の世論調査では、安倍晋三の「国葬」に反対が47・3％で、賛成は30・5％。旧統一教会と政治家の関わりについて実態解明が「必要」が77・3％にのぼっている。銃撃事件のあと次々と表面化した安倍ら自民党国会議員と旧統一教会の関係が国民に与えた不信感は予想外に大きい。

年金　自民党と旧統一教会の関係の暴露は、小泉政権のときに閣僚や与野党の国会議員らの国民年金未納・未加入が相次いで明らかになった問題と似たところがある。政治家の側の違法性は存在しないか、あるいは軽微にとどまっているが、倫理性を厳しく問われる問題となり、しかも人数が少数にとどまらない点で両者は共通している。未納・未加入が明らかになった当時の官房長官は辞職しており、統一教会問題でも国民は政治家たちを簡単には見逃さないだろう。

30代　教団のほうは霊感商法など違法なことをしていても、議員の側は法に反するようなことはしていない。それをいつまでも追及するのは、違法でないことを長期にわたって騒いだモリカケの二の舞になるだけだという批判もある。

年金　国民の受け止め方はまるで違う。そこにはけがれを潔癖に排除する日本人の古代以来の伝統的なメンタリティーが働いていると思われる。

芸能人が反社会的勢力と少しでも接触すると、本人は違法なことをしていなくても、それと同等のようにみなされ、たちまち仕事から排除されるのは、悪い者と接触した者は同じように悪い者になるという、日本人のけがれを拒絶する思想、心理学的に言えば「日本人の強迫的な性格」（心療内科医・河野友信）が大きな要因のひとつになっていると考えられる。

旧統一教会と議員との関係について言えば、議員が教団の広告塔の役割を果たし、霊感商法や献金の強要などの被害を拡大する結果になるという論理的な予測をする以前に、関わること自体、接触それ自体が議員を悪い存在にしてしまうという直感的な判断を国民はしていると推察される。それに理屈で反論するのは難しい。自民党には相当なダメージとなるだろう。

30代　自民党は「もうかかわりません」と言って逃げ切るのではないか。

年金　けがれを排する日本人のメンタリティーは新型コロナをめぐってもあらわになった。感染症の専門家が、コロナは風邪と大差がなく、屋外ではマスクを外してもかまわないと言っているのに、いまもなおほとんどの国民がマスクを着けて外を歩き、発熱外来には無症状や軽症でも訪れる人が絶えない。そこまでコロナを恐れるのは、科学的な理由よりも非科学的な理由、すなわちけがれをいとう宗教的な理由によると考えるほかない。

けがれの観念には罪の観念が含まれている。旧統一教会は霊感商法など違法行為を重ねたカルトとされているが、安倍自身が同種の違法行為をしたり、そそのかしたり、手伝ったりしたわけではない。それなのに、教団と関係しただけで、あたかも同じ罪を犯したかのようにみなされ、「国葬」に値しないと過半の国民に認定されたことになる。けがれはけがれたものと接触しただけで伝染し、同じ罪を背負うと考える古代的な心性が働いた結果と考えるほかない。これは当分のあいだ岸田政権を呪いのように脅かし続ける可能性がある。

ニュース日記　842

中村　礼治

統一教会の衝撃